

## 英国の大学における教育の質保証

-学生の声により良い教育に繋げる仕組みに着目して-

ロンドン研究連絡センター

楠根 由美子

## 1. はじめに

英国では、1992年のポリテクニク及び高等教育カレッジを大学に昇格させる政策により、高等教育人口が飛躍的に増加した。これにより、もはや高等教育は一部のエリート層に無償で提供される閉ざされたものではなくなった。高等教育人口の増加は、政府の財政を圧迫する結果となり、1998年について年間上限1000ポンドの授業料徴収が始まるに至った。授業料の引き上げはその後も段階的に行われ、2012年には年間上限9000ポンドまでの徴収が可能となり、値上げ傾向は現在も続いている。近年、大学関係者の間で、学生は高い授業料を払ってサービスを受ける‘Customer’であると皮肉的に表現されることも珍しくない。

2012年の授業料値上げに向けた準備段階である2011年に、高等教育白書 *Students at the Heart of the System*<sup>1</sup>が発表された。これは、将来のイングランドにおける高等教育政策をまとめた白書であり、より良い学生経験の提供・優れた教育の提供・学生に対する雇用市場への十分な準備教育の提供・出願者へ向けた十分な情報提供・低所得家庭からの学生の公正なアクセスを加速するための資金措置などが政府の計画に盛り込まれた。この白書ではその名のとおり、高等教育の中心にいるのは学生であることが強調され、大学は学生のフィードバックに耳を傾け、彼らと協同していくことが求められている。つまり、授業料の引き上げに伴い、大学はその授業料に見合った、学生の求めるサービスを保証しなくてはならないということを示したのである。

上述の背景を踏まえ、英国では高等教育における質保証プロセスのあらゆる面において、学生の意見を積極的に取り入れる姿勢が見られる点に筆者は興味を持った。なお、*Student Union*（以下ユニオンと言う）という学生による自治組織が、学生の声を代弁し、大学に届けるのに大きな役割を果たしていることも分かった。筆者は本研修期間中、英国の大学がどのように学生の意見を取り入れ、より良い教育の提供に結び付けているのか、また、その上での問題点について、ユニオンや大学関係者に聞き取り調査を行った。本報告書では、英国の大学における教育の質保証システムのうち、重要な点について概略を述べた後、筆者が実際に現地の大学で行った聞き取り調査の結果を紹介したい。

なお、英国では大学に対する教育と研究の評価は分かれており、本報告書で取り扱う内容は基本的に教育に限定されることを事前に断っておく。また、大学教育及び質保証のシステムは、イングランド・ウェールズ・スコットランド・北アイルランドで共通する部分も多くあるものの、それぞれ異なっている。本報告書はイングランドの状況を踏まえて作成したものであり、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドには必ずしもあてはまらない場合があることをご承知置き願いたい。

---

<sup>1</sup> [https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment\\_data/file/31384/11-944-higher-education-students-at-heart-of-system.pdf](https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/31384/11-944-higher-education-students-at-heart-of-system.pdf) (2017年2月5日アクセス)

## 2. 英国における大学教育の質保証（外部質保証）

現在、英国では 1992 年の高等教育改革に次ぐ大きな改革が進められており、外部質保証の仕組みも大きな転換の時にある。2016 年 5 月に政府が発表した高等教育白書 **Success as a Knowledge Economy**<sup>2</sup>では、社会的流動性及び国家の経済成長に資するという信念のもと、高等教育セクターを市場に開かれたものとする計画が示された。質の高い高等教育機関の新規参入を促進し、機関間の競争を加速することで、セクター全体の質を上げる一方、低所得家庭からのフェア・アクセスに配慮し、大学進学者数の増加を目指す内容となっている。このようなコンテキストを背景に、各高等教育機関が良質な教育を迫及するためのインセンティブを与えるとともに、学生が、どこで質の高い教育を受けられるかを知り、自分に適した機関を選択するために必要な情報を与える目的で、2015/16 年に新しい教育評価の枠組みである **TEF: Teaching Excellence Framework** の試行が始まった。学生が十分な情報をもとに大学を選択することを可能とするためには、教育の質に関する情報並びに卒業後の進路についての情報の公開が不可欠と指摘されている。

この改革により、既存の高等教育機関は、**APR: Annual Provider Review** 及び **TEF: Teaching Excellence Framework** の二つの枠組みにて、教育評価が実施されることとなった。APR は 2016/17 年度に、TEF は 2015/16 年度に試験的に導入が開始された。

### 2-1. APR: Annual Provider Review

APR は、**HEFCE: Higher Education Funding Council for England**<sup>3</sup>から公的資金の投入を受けている全ての高等教育機関について実施される。これは、教育の質と学位の水準について、大学が最低限の質をクリアしているという、ベースラインの保証を与えるものである。よって、各機関間の違いを計るものではない。APR は HEFCE が毎年、別途実施している以下の調査を統合し、実施するものである。そのため、大学に新たなデータの提出は求めておらず、大学の負担軽減を図っている。

1. 財政面における持続可能性及びマネジメントとガバナンスについての調査
2. 2014/15 年度に政府が入学定員を撤廃したことを受け、それが質の低下を招いていないかを確認するために行っている入試パターン等の調査。2015 年の調査からは、学生のフォーマル・インフォーマルな苦情とその原因にいかに対処しているかという観点も加わった。

---

<sup>2</sup> [https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment\\_data/file/523546/bis-16-265-success-as-a-knowledge-economy-web.pdf](https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/523546/bis-16-265-success-as-a-knowledge-economy-web.pdf) (2017 年 2 月 5 日アクセス)

<sup>3</sup> <http://www.hefce.ac.uk/> (2017 年 2 月 5 日アクセス)

## 2-2. TEF: Teaching Excellence Framework

APR が最低限の質の保証を与えるものであるのに対し、TEF はその上でさらに各大学の教育の質を評価し、機関間のパフォーマンスの違いを明らかにするものである。本スキームには希望する大学のみ参画する。評価結果は金・銀・銅の三段階評価で示され、評価結果に応じて、各大学はインフレ率に対応して授業料を増額することができる計画だ。2015/16年に試験的に導入が始まり、2020年の本格実施までの数年間で、指標・実施方法の見直しを行いながら最適な評価システムを構築することとなっている。2017年現在、TEFは試行段階にあるため、最終的な実施形態は明らかになっていないものの、試行1、2年目については、金・銀・銅ともにインフレ率に応じた同額の値上げ、3年目は金・銀がインフレ率の100%、銅が50%の値上げが許可される計画だ。4年目以降については詳しい情報が公表されていない。TEFと連動した更なる授業料の値上げについては、現在英国の大学関係者の間で大きな議論を呼んでいる。

TEFでは「Teaching Quality (教育の質)」「Learning Environment (学習環境)」「Student Outcomes and Learning Gain (学習成果)」の3つの観点から評価が実施され、全国学生満足度調査 (NSS : National Student Survey)、HESA: Higher Education Statistics Agency<sup>4</sup>による中途退学者数のデータ並びに就職状況調査 (DLHE : Destinations of Leavers from Higher Education Survey) のデータが評価の指標として使用される。また、TEFではベンチマーク<sup>5</sup>という手法が採用されている。各大学における、開講科目や性別の違いのために単純に比較できない評価対象をベンチマークすることで、平等に評価・比較できるようになる。別表1にて、評価の観点及び指標等をまとめる。

別表1 : Metrics quick reference table (TEF: year two specification Glossary<sup>6</sup>より抜粋)

Aspect	Teaching Quality		Learning Environment		Student Outcomes and Learning Gain	
	Metric	Assessment and feedback	Academic support	Non-Continuation 中途退学者数	Employment or further study	Highly skilled employment or further study
Source	NSS	NSS	NSS	HESA	DLHE	DLHE
Target group	最終学年の学生	最終学年の学生	最終学年の学生	1年生	卒業生	卒業生

<sup>4</sup> <https://www.hesa.ac.uk/> (2017年2月5日アクセス)

<sup>5</sup> P75-76 Annex F: Example of benchmarking  
[http://www.hefce.ac.uk/media/HEFCE.2014/Content/Pubs/2016/201632/HEFCE2016\\_32a-g.PDF](http://www.hefce.ac.uk/media/HEFCE.2014/Content/Pubs/2016/201632/HEFCE2016_32a-g.PDF) (2017年2月5日アクセス)

<sup>6</sup> P66 Annex D : Metrics quick reference table  
[https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment\\_data/file/556355/TEF\\_Year\\_2\\_specification.pdf](https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/556355/TEF_Year_2_specification.pdf)

Data years ※括弧はパートタイムの学生を示す。	Y1 2015/16	2014	2014	2014	2011/12 (2010/11)	2012/13	2012/13
	Y2 2016/17	2015	2015	2015	2012/13 (2011/12)	2013/14	2013/14
	Y3 2017-18	2016	2016	2016	2013/14 (2012/13)	2014/15	2014/15

### 3. 全国学生満足度調査／NSS: National Student Survey

#### 就職状況調査／DLHE: Destinations of Leavers from Higher Education Survey

NSS は HEFCE が外部に委託する形で 2005 年より毎年実施している全国的な取り組みで、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの大学（学部）の最終学年の学生を対象に、コースでの学習経験についてアンケート調査を実施するものである。その結果は学生の卒業 6 ヶ月後に実施される DLHE（就職状況調査）の結果とあわせて、ウェブサイト<sup>7</sup>にて広く公開される。NSS の質問項目には「教員は説明が上手だったか」等ティーチングに関するもの・「成績評価基準は明確であったか」等成績評価に関するもの・「必要なときに大学スタッフの支援を得られたか」等学習支援に関するものなどがある（質問項目の詳細については別表 2 参照）。

DLHE は卒業生の給料や就職形態（専門職や管理的な職についているか等）を調査している。NSS と DLHE の結果は、大学へ出願前の学生にとっては、大学選びに関する重要な検討資料となる一方、前章で紹介した新しい教育評価制度である TEF の評価指標となる。

NSS の質問項目は「全くそう思う: Definitely agree」「大体そう思う: Mostly agree」「どちらともいえない: Neither agree nor disagree」「あまりそう思わない: Mostly disagree」「全くそう思わない: Definitely disagree」「あてはまらない: Not applicable」の 6 段階の選択式となっている。加えて、自身のコースにおける学習経験全体についてのコメントを記述する項目も設けられている。学生からのフィードバックは各大学において、カリキュラムの改善並びにティーチングの向上、学習環境の改善等に役立てられている。この調査は匿名で実施されており、評価結果も匿名で大学へ送付される。2017 年の NSS 調査から質問項目が変更されることになった<sup>8</sup>。

#### 別表 2 : NSS 2016 質問項目一覧

<sup>7</sup> UNISTAS <https://unistats.direct.gov.uk/> (2017 年 2 月 6 日アクセス)

<sup>8</sup> 2017 年調査の質問項目

[https://www.open.ac.uk/ousa/sites/www.open.ac.uk.ousa/files/files/10\\_16\\_7%20National%20Students%20Survey%20\(NSS\)%20-%20APPENDIX%20C%20-%20HEFCE%20Circular%20New%20Questions.pdf](https://www.open.ac.uk/ousa/sites/www.open.ac.uk.ousa/files/files/10_16_7%20National%20Students%20Survey%20(NSS)%20-%20APPENDIX%20C%20-%20HEFCE%20Circular%20New%20Questions.pdf) (2017 年 2 月 6 日アクセス)

<b>The teaching on my course</b>
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Staff are good at explaining things.</li> <li>2. Staff have made the subject interesting.</li> <li>3. Staff are enthusiastic about what they are teaching.</li> <li>4. The course is intellectually stimulating.</li> </ol>
<b>Assessment and feedback</b>
<ol style="list-style-type: none"> <li>5. The criteria used in marking have been clear in advance.</li> <li>6. Assessment arrangements and marking have been fair.</li> <li>7. Feedback on my work has been prompt.</li> <li>8. I have received detailed comments on my work.</li> <li>9. Feedback on my work has helped me clarify things I did not understand.</li> </ol>
<b>Academic support</b>
<ol style="list-style-type: none"> <li>10. I have received sufficient advice and support with my studies.</li> <li>11. I have been able to contact staff when I needed to.</li> <li>12. Good advice was available when I needed to make study choices.</li> </ol>
<b>Organisation and management</b>
<ol style="list-style-type: none"> <li>13. The timetable works efficiently as far as my activities are concerned.</li> <li>14. Any changes in the course or teaching have been communicated effectively.</li> <li>15. The course is well organised and is running smoothly.</li> </ol>
<b>Learning resources</b>
<ol style="list-style-type: none"> <li>16. The library resources and services are good enough for my needs.</li> <li>17. I have been able to access general IT resources when I needed to.</li> <li>18. I have been able to access specialised equipment, facilities, or rooms when I needed to.</li> </ol>
<b>Personal development</b>
<ol style="list-style-type: none"> <li>19. The course has helped me to present myself with confidence.</li> <li>20. My communication skills have improved.</li> <li>21. As a result of the course, I feel confident in tackling unfamiliar problems.</li> </ol>
<b>22. Overall, I am satisfied with the quality of the course.</b>

#### 4. Student Union (ユニオン)

本テーマについて理解するため、聞き取り調査の対象としては、ユニオン、教員及び Student/Course reps という3つの立場の方々を選定した。聞き取り調査の結果を紹介する前に、ユニオン並びに Student reps について説明を加えたい。

ユニオン

ユニオンは、各大学にある大学とは独立した学生による自治組織である。在学生による選挙にて選出されたメンバーで構成されており、学生を巻き込んで実に様々な活動を展開している。コースや学生生活全般に関して、学生の声を代弁したり、学生に様々な経験の機会を与える上で重要な役割を担っている。英国の教育の質保証においては、カリキュラム内外を問わず、より良い学生経験を確保することも重要な観点となるので、その意味でもユニオンの意義は大きい。戦略や細かい活動は各大学で異なるものの、概ね以下のような活動を実施している。その他、詳細はユニオンへの聞き取り調査をご覧ください。

- ・教育関係：アカデミックな会議への参加、Student/Course reps のサポート
- ・イベントの開催：新入生へのオリエンテーション、歓迎会、パブリックセミナー、就職情報イベント、キャンペーン等
- ・福祉：健康（身体的・精神的なものを含む）、勉学、ハラスメントに関する相談等
- ・クラブ活動の管理
- ・カフェ・バー・ショップの経営

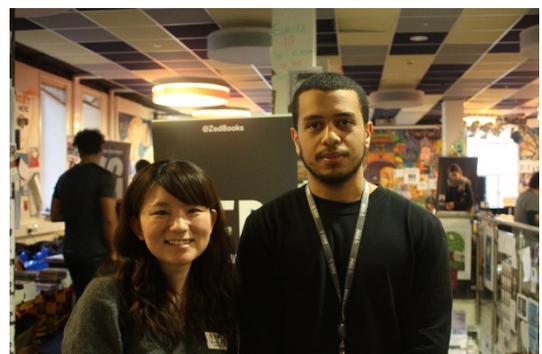
### Student / Course reps

Student /Course reps とは、各学部やコースの中で、授業や学生生活について、学生の意見を代弁し、アカデミックに届ける役割を担う学生である。各大学の学部の決まりに従い、学生による選挙等で選出される。彼らは学部のミーティングに参加し、学生の視点から意見を述べるとともに、学部のミーティングで話し合われた情報を学生にフィードバックする役割も担う。

## 5. インタビュー調査

### 5-1. School of Oriental and African Studies, University of London (Students' Union)

大学の特徴：ロンドン市内中心部にキャンパスを構え、英国で唯一アジア・アフリカ・中近東学を専門とする大学。学生数は 4,755 名（学部生 2,940 名、大学院生 1,815 名）。留学生の割合は 39.5%。※Good University Guide 2016 より

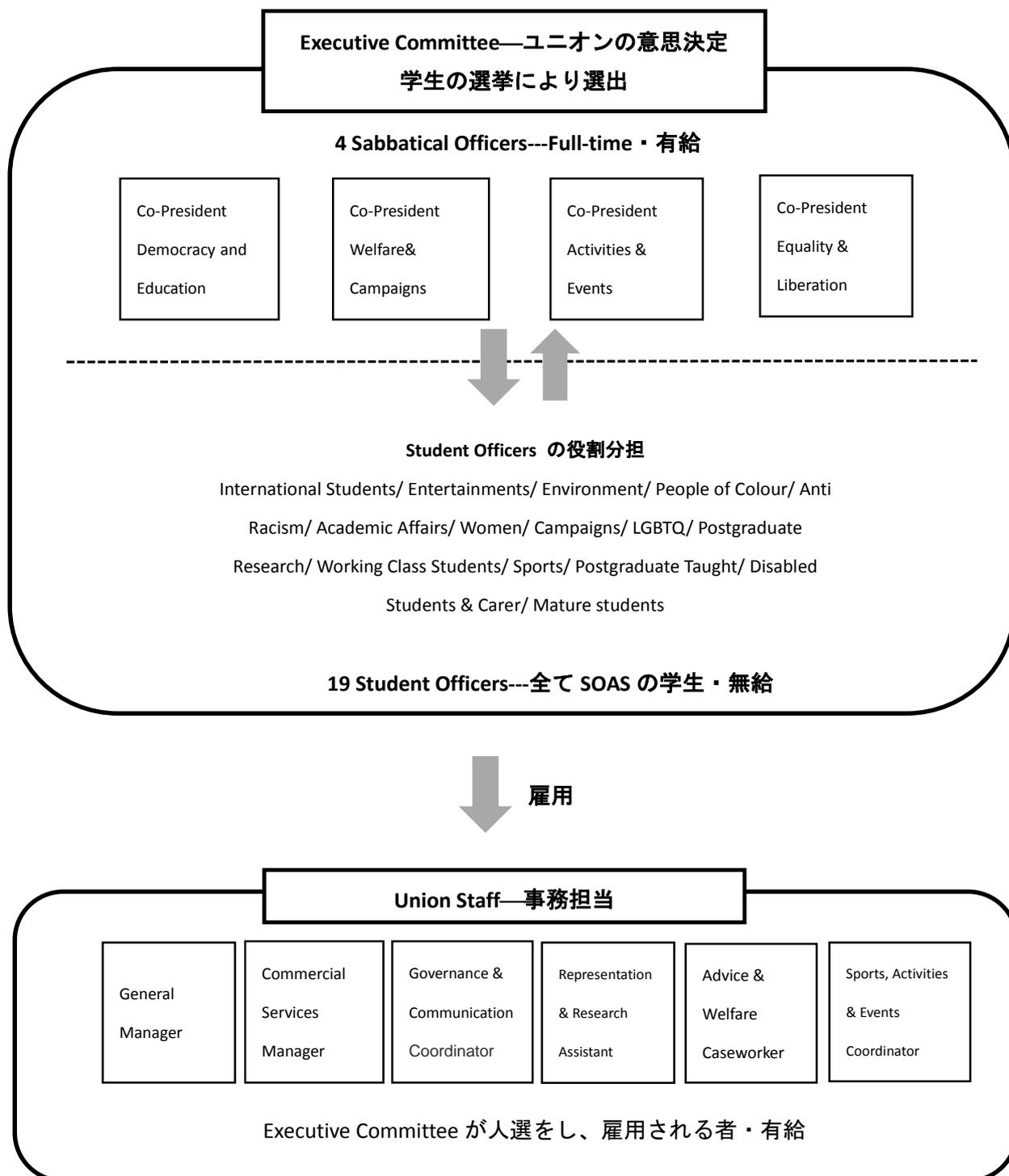


SOAS Students' Union にて。右：Mr Ali Habib  
左：筆者

インタビュー対応者：Mr Ali Habib, Co-President (Democracy and Education),  
SOAS Students' Union

※ユニオンの実態を理解するため、組織の構成を中心に聞き取り調査を行った。

SOAS Student Union の組織図



Q. 組織について

4名の Co-president (Sabbatical officer とも言う)と 19名の Student officer により、Executive committee が構成されている。Executive committee のメンバーは学生による選挙により選出される。Co-president は SOAS の教育課程を修了した者または、SOAS の学生（ただし、役職期間中は休学し、ユニオンの活動に専念する。）が就任する。任期は2年間。選挙で選ばれれば、過去の卒業生も Co-president になれなくはないが、大学の現状に詳しい在学学生または直近の卒業生が望ましい。19名の Student officer は全て SOAS の学生で、いずれかの教育課程に在籍中である。Co-president と Student officer は互いに協力してイベントを運営したり、 이슈の解決等に取り組む。Co-president と Student officer の間に決まった指揮系統があるわけではなく、案件により、各担当の Co-president が適切な Student officer に指示を出している。

また、Executive committee の他に 6名の Union staff がいる。Union staff はユニオンの活動に付随する事務作業等を中心に担当する。Union staff は Executive committee のメンバーによる選考を経て雇用される有給のフルタイムスタッフである。例えば、Commercial services & manager はショップやバーを運営する責任を負っている。Sports activities & events coordinator 担当は部屋の予約や運動場の管理などを担当している。任期はなく、現在のスタッフは全員 SOAS の卒業生である。

#### Q. ユニオンの会議について

##### UGM: Union General Meeting

ユニオン全体のポリシーに関わることは全てこの委員会を通る。UGM では学生がモーション<sup>9</sup>を提出し、チェアは Co-president (Democracy and education)が務める。モーションについての討論の末投票を行い、採択されれば、ユニオンはこの提議に沿った運営を行うこととなる。最低 60 名が出席し、投票する必要がある。大学のスタッフも含め、SOAS の誰でも参加できるが、投票権があるのは学生のみ。

##### Executive Meeting

ここでは、例えば、この1週間でどんな活動をするか等、より具体的な活動について話し合われる。会議を構成するメンバーは Executive committee のメンバー。

##### Board of Trustees

会議の構成メンバーは Executive committee メンバー。月に1回、財政状況をチェックする。ユニオンはチャリティなので、収支が均等でないといけない。ここでは、どのようにお金を使ったか、どうやって余剰を出すかを話し合う。

##### Finance Committee

Board of trustees にかける前にファイナンスにかかる件をここで話し合う。

##### Participatory Budgeting Meeting

---

<sup>9</sup> 学生がユニオンの運営、ユニオンの目標及びそれをどのように達成すべきかに関して重要と信じる事柄についての提案。

ユニオンが財政的な支援を行う先を決定する会議。例えば、あるクラブ活動がイベントを実施するのに必要な資金があり、経費の申請をした場合、この会議で必要性について討論・投票が行われ、採択されれば支援が決定する。

### Open Forum

学生と教員とユニオンが参加する会議。今年は SOAS が教育の方法を変えたため、大学の行っていることは学生の利益になり、SOAS の強みが減るわけではないということを発信した。SOAS は英国でもっとも特徴的な大学のひとつとして知られているので、他大学と同じようなことをしては、大学の大切な財産を失ってしまうことになる。このようにすべての学生に関わる重要な案件を大学と学生の間で共有し、話し合うためにこのフォーラムを開催している。SOAS のだれでも参加できる。

#### Q. ユニオンの予算について

大学から措置されている。大学からの予算のほかにも、バーやショップの売り上げもある<sup>10</sup>。

#### Q. どれくらいの頻度で大学の会議に出席しているのか？

平均して、1日に2、3個のミーティングに参加し、学生の声を大学に届けている。教員がコースの内容を話し合うアカデミックなミーティングに参加することもあれば、大学の財務に関するミーティングに参加し、授業料の増減を話し合うこともある。加えて、EU 離脱等個別の事象について召集されることもある。

## 5-2. SOAS (教員)

訪問日：2016年12月8日

インタビュー対応者：Dr Barbara Pizziconi, Reader in Japanese

Applied linguistics/Head, Departments of the Languages and Cultures of Japan and Korea



SOAS キャンパスの様子

#### Q. NSS についてどのように考えているか？

NSS はこれまでとても重要であったが、TEF の評価材料として使用されるようになったため、その重要性がさらに増してきている。すでに大学は REF: Research Excellence Framework<sup>11</sup> で研究費（公費）の傾斜配分を受けているが、TEF の導入により、NSS と大学が受け取ることができるファンディングの間にも直接的な繋がりができた。多くの教員はこのことについて批判的だ。なぜなら、そもそも多くの教員が NSS 自体について批判的だからだ。NSS はクラスで起こっ

<sup>10</sup> 財務状況の詳細はユニオンのウェブサイトを確認できる。<https://soasunion.org/pageassets/yourunion/policy/SOAS-SU-2015-CC-Copy-SAB-20160428.PDF>

<sup>11</sup> <http://www.hefce.ac.uk/rsrch/> (2017年2月6日アクセス)

ている本当のことを反映していないし、何がよい教育につながるのか示していない。加えて、NSSの質問は学生に、良い教育は定量的に計れるものであるという誤解を与えている。間違った基準で教育を計るのみならず、学生に間違った認識を与えている。学生は大学にとって、今や高額の授業料を収める顧客でもある。なので、大学が学生の要求に応えること、そして、よい教育とは何かという説明責任を果たすことは重要なことだ。しかし、この調査がその目的を果たしているかということ、それは、共通の問題認識である。

#### Q. NSSの問題点と認識していることはどのようなことか？

この調査は匿名で行われ、同時に9名以下の学生グループの調査も大学には送付されない。なぜなら、大学に回答者を特定されないようにするためだ。10名以上の学生がいるコースは各問いに対する合計の結果を受領する。それに加えて、学生からのコメントも送付される。もちろん、そのコメントも匿名だ。学部全体で回答を受け取るのだが、現実の問題としては、私達の学部には日本プログラムと韓国プログラムがあり、その回答がどちらを指しているのか見当がつかない点である。全く違う教員陣により運営される全く別のプログラムなのに、回答がどちらを指しているのかが分からない。匿名性を守れば守るほど、大学が得られる情報は不明確なものとなる。これが一つ目の問題だ。

二つ目の問題は、同じ学部の中でも色々な評価があるということだ。大体5%はプログラムについてとても低い評価を下す一方、5%はプログラムに大変満足しているという評価をする。それ以外の学生は特に不満がなく概ね満足という評価だろう。これに対してどのように対処するかは難しい問題だ。

三つ目の問題としては、たとえばSOASが競争力を維持するために、そして学生の学習到達度を保つために、プログラムを難しいものにした場合、そのプログラムは、よりネガティブな結果を得る可能性が高くなる。もし、NSSで良い結果を得たいのなら、手っ取り早い方法はプログラムの難易度を下げることだが、それではもちろん学生のためにならない。

多くの学生にとって、大学の1年目はとてもチャレンジングなものとなり、彼らはショックを受ける。2年生になると状況にも慣れ、なぜ1年目がタフであったか理解する。3年目は日本に留学するが、ここでどのような経験をするかで、4年目の考え方が完全に変わる。例えば、日本での留学期間中勉強が難しくなかった場合、4年生をSOASで再開したときに再度ショックを受けるが、例えば、日本留学期間中に漢字のできる中国人学生が沢山いる状況の中でもまれた学生は、SOASでの4年目はサポートが充実していると感じる。このように、4年目のものの見方は3年生の間の留学先でどのような経験をしたかが大きく影響する。それは、私達がコントロールできるものではない。なので、コメントの全てを私達がコントロールできるものでもないのだ。

#### Q. ということは、NSSに対して戦略を立てることは難しいのか？

そう考えている。直近の調査の結果を見ると、SOAS全体の結果と日本・韓国学部の結果に別れている。これ以上のプログラム別の内訳はない。本学部には、日本に関するプログラムが二つ、韓国に関するプログラムが二つ、合計4つの学部レベルのプログラムがあるが、調査の結果はどのプログラムを指すのかわからない。調査のうち、“Teaching on my course” “Assessment and

feedback” “Academic Support”等、学部に関わる項目に私達は注目している。“Teaching on my course”のカテゴリーは主観的な意見に左右される問いが見られる。例えば、“Staff are enthusiastic”という問いがあるが、教員は静かに情熱的になれることもあるだろう。学生がどのように教育の情熱を認知するかは分からない。私にはこのような視点は学生の主観的なものになってしまうと思うし、それが良い教育に影響するのかわからない。

しかし、“Assessment and feedback”という観点は我々がもっとも力を入れて取り組んだ点である。その結果、大学全体の平均より、高い結果を得ることができた。過去にこの点について学部で議論を重ねたのだ。私達は学生がエッセイのどこが悪いのか、そして語学学習の点においても、非常に明確なフィードバックを求めているということがわかった。フィードバックをきちんとして、学生を納得させることができれば、たとえ点数が悪くても、学生は満足する。しかし、“Criteria used in marking have been clear”は大学の平均より低くなっているため、現在はこの点について取り組もうとしている。学部の中でガイドラインを作成し、学生が簡単に見つけることができるウェブサイトに掲載したいと思っている。これにより学生に課題を出す前に、評価基準を確認してもらうことができるようになる。また、この評価基準を使って学生同士でエッセイを添削させるということもできる。そうすることにより、学生はただ受動的に説明を受けるのみならず、自分で評価基準を使うという作業をするので、より評価基準に対する理解を深めることができるようになる。これまでの問題としては、教員は何度も評価基準を説明しているのだが、学生は分からないと言うことだ。この問題を解決するためには、学生にこの基準を使わせなくてはならないと考えている。このような構想を練っている。

我々はこのようにして、NSS を活用している。また、調査結果がどのプログラムを指すものか、予想することは試みている。学部のミーティングには学生も参加するので、学生も含めてこれらについて議論するのだが、そこで、学生の質問に対する解釈と教員の解釈の違いに気づかされることもある。例えば、“The course has helped me to present myself with confidence”という質問事項があるが、私達教員はこの質問の意図を、大学での教育を終えて、例えば「職を得たときや就職試験の際に、自分の身につけた能力に対して自信が持てるか」ということと理解している。しかし、学生は「クラスで発表するときの自信」という風に解釈していたりする。そもそも、質問事項の定義をより明確にする必要がある。

毎年、NSS の結果を受けて、次の年に向けてどのような戦略を立てたかレポートを作成している。我々がNSS の結果にどのようにリアクションしようとしているのかを学生に効果的に伝えることも課題の一つだ。Student reps は学部での会議の内容や我々のアクションについて他の学生に伝える役割を担っているが、人数が十分ではないことなどの理由から難しさを感じている。

**Q. TEF についてどのように考えているか。**

私の意見としては、TEF は行き過ぎた marketization（自由主義市場への移行）であり、教育とは関係ないと思っている。評価の結果、メダル式の評価を得て、授業料に反映できるというのは、乱暴な戦略だ。全てがマーケットに組み込まれてしまうと思う。ゆくゆくは、(政府は) 高等教育を国費で賄うのではなく、全てプライベートなシステムに移行してしまいたいのではないかと危惧している。だから授業料の上限を取り払う動きになっているのではないだろうか。そうなっ

てしまえば、高等教育は全ての人に手が届くものではなくなってしまう。これが最終的な形ではないかととても恐れている。ローンなどで救済措置があるだろうが、全ての学生をカバーできるとは思えない。教育のエリート化が進んでしまうと思っている。

しかし、興味深いことに、ユニオンを中心に NSS をボイコットしようという動きが生じている。学生もこれが正しい指標であるのかと懐疑的になってきているのかもしれない。今後の動きを注視していきたい。

### 5-3. University of Warwick

大学の特徴：イングランド中西部のコヴェントリーに位置する総合大学。学生数は 17,755 名（学部生 1,2675 名、大学院生 5,080 名）。留学生の割合は 27.7%。※Good University Guide より。



ウォーリック大キャンパスの様子

訪問日：2017 年 1 月 24 日

インタビュー対応者：Dr Mike Joy, Reader in Computer Science, University of Warwick

学部生 2 名、大学院生 2 名

※ウォーリック大には各学部、コースの教育、学習及び学生支援についての問題を、教員と学生が話し合い、解決するための会議 ‘SSLCs: Student Staff Liaison Committees<sup>12</sup>’ が設置されている。コンピューターサイエンスの SSLCs のメンバーである、Dr Mike Joy 及び Course reps（学部生 2 名、PhD 学生 2 名）に聞き取り調査を行った。

SSLCs の構成（コンピューターサイエンスの場合）

<b>Research Students</b> PhD+MSc	<b>SSLCs</b> 教員+学生	<b>Joint Course</b> e.g. Computer Sciences+Engineering
<b>Taught Master</b> MSc	<b>SSLCs</b> 教員+学生	
<b>Undergraduate</b> 3 <sup>rd</sup> year	<b>SSLCs</b> 教員：Academic Convenor 等 + 学生：Course	<b>SSLCs</b> 教員+学生
2 <sup>nd</sup> year		
1 <sup>st</sup> year		

- 各 SSLCs は、平均 1 学期（10 週間）に 2 回開催。
- アカデミックスタッフは、Convenor, Senior tutor, Course manager, 事務職員の代表者など、学生の質問に答えられるキーパーソンが参加する。
- Dr Mike Joy は学部の Academic convenor を務めている。
- SSLCs のチェアは学生が努める。

#### 5-3-1. Dr Mike Joy（教員）

<sup>12</sup> <https://www.warwick.ac.uk/sslc/whatis/>（2017 年 2 月 6 日アクセス）

Q. これまでにどのような内容がミーティングで話し合われたのか？

SSLCs のルールで、特定の学生や教員に対する苦情等は議論できないこととなっている。なので、あまり威圧するような内容は議題にならない。例えばラボのスペースが十分でないなどというものだ。どのようなことと特定するのは実は難しく、何でも話し合われる。万人に共通の話題が中心だ。問題は解決できる時もあれば、できない時もある。

Q. ティーチングに関することが話し合われることはないのか？

ティーチングに関する要望をもらうときもある。例えば成績評価のフィードバックは大学レベルでも重要な焦点となっている。それがどのように重要なのかという議論は欠けていると思うが、それは置いておいて、今実際に議論になっているのは成績評価をして、学生にフィードバックを返すまでの時間だ。大学は成績評価を 20 日で行って、もちろん、ダブルチェックもして学生に返すよう定めているが、200 人の学生がいるので大忙しだ。1,2 件遅れてしまうことがあるが、評価の遅れは苦情につながることもある。その場合は状況を説明するしかない。

Q. NSS が本当の教育の質を計れていないという批判がありつつも、TEF に利用されるという状況を、大学はどのように捉えているのか？

大学は教員に NSS について対策を打つよう、強くプレッシャーをかけてきている。ミーティングを開いて、昨年の調査結果を分析し、どのように対処するかを話し合い、学生に大学が NSS についてリアクトし、学生の声を無視していないことを示している。問題は、NSS スコアの小さな違いが、リーグテーブル<sup>13</sup>において大きな違いを生んでしまうということだ。ガーディアンに載っているリーグテーブルの上位 10 位、20 位に入っている大学に学生は行きたがる。大学がトップ 10 に入れなかったら、執行部はとても慌てるだろう。

Q. しかし、英国には良い大学がたくさんあると思うが？

英国には 150 の大学がある。その中で 40 年以上前から存在する約 50 の大学<sup>14</sup>は個人的には実際どこも良い大学だと思っている。その中のいずれかの大学で例えばコンピューターサイエンスの学位を取ったとしたら、それは、他の (50 の) 大学と同じくらいすごいことだ。しかし、リーグテーブルを見ると、人々はそのような見方ができない。40 位の大学が 10 位の大学より本当に悪いのか、それは分からないのだ。カウントの仕方にも問題があると思っている。満足しているにカウントされるのは調査で **Definitely agree** と **Mostly agree** を選択した人のみである。**Neither agree nor disagree** を選択した学生は満足していないとカウントされてしまう。そして、そのようにカウントされることを大学は学生に説明できない。なので、調査結果は若干生徒の回答とは違う意味を持ってしまう。

---

<sup>13</sup> <https://www.theguardian.com/education/ng-interactive/2016/may/23/university-league-tables-2017> (2017 年 2 月 6 日)

<sup>14</sup> 12-13 世紀のオックスフォード大学及びケンブリッジ大学の設立以降から、1963 年の Robbins 報告を受けて 1960 年代までの間に設立された大学郡を指す。

## 5-3-2. 学部生 2 名 (Course reps)

Q. なぜ Course reps と SSLCs のチェアをしようと思ったのか？

単純に面白そうだったし、大変な仕事にも見えなかったからだ。学生の助けになって、コースの活動に参加することは価値があると思った。

Q. 学生の声をどのように集めて、それを大学に届けているのか？

オンラインフォームがあるが、これは実はあまり使われていなく、口頭で集めることが多い。また、Facebook のグループもある。SSLCs の前に、学生に何か議論してほしいことや大学へのフィードバックがないか尋ねている。

Q. どのようなことが議題に上がるのか？

どのようにコースを改善すれば良いかに関する小さなことが議題になる。例えば、同じ週に 3 つか 4 つの課題の締め切りが重なり、大変なので、次の年は締め切りに配慮してほしい等々。実際にそのモジュールについては、課題の締切の一つが早められ、オーバーロードにならないように配慮された。

Q. 英国では、就職試験の際に学位の等級<sup>15</sup>が考慮されることもあり、学生は成績について真剣に捉えていると感じている。

そのとおりだ。成績評価に納得がいけない場合は抗議して、再度フィードバックをもらうこともできる。そこでのディスカッションで、教員の成績評価が間違っていたということが変わることもあれば、次のタームでどのようにすれば改善されるかなどアドバイスをもらうこともできる。Mitigating circumstances という制度もあり、病気や家族の不幸など、学習に集中できない状態に陥ったときにその状況を考慮してもらうこともできる。例えば、私は 1 年生のときに祖母を亡くし、テストに集中できる状態ではなかった。なので、私のマークは少し低かったが、状況を考慮して引き上げてもらうことができた。各学部で Mitigating circumstance を取り扱う専門の学生が決められており、その学生に相談に行くことになっている。何が起こったのか、それがどのように自分の学習に影響を与えたのかなどをフォームに書いて提出し、学期の最後に、成績評価の材料と合わせて検討の上、最終の成績評価が下される。

Q. 英国の大学ではエンプロイヤビリティ（労働市場で通用する職業能力）が盛んに議論されているが、Course reps の活動に関わることは、エンプロイヤビリティを上げると思うか？

そう思う。とくにチェアをすることで、リーダーシップやコミュニケーション能力が培われると思っている。単に、ミーティングを運営するだけでもそのような力がつくと感じる。

---

<sup>15</sup> Degree classification 等と言われ、成績に応じて学位の等級が決まる。成績が良い順に 1st class honour, Upper 2nd honour, Lower 2nd honour, Other honours / Pass without honours に学位が分類される。英国では多くの企業が学位の等級を就職試験の際に考慮している。

Q. 近年、TEF の導入に伴い、NSS ボイコットの動きが出ているが、それについてはどう思うか？

学生 A：NSS に回答することが、授業料を上げると言われているが、私自身は NSS に回答すると思う。そうする他に自分の正直な意見を訴える選択肢がないからだ。

学生 B：私もそう考えている。ユニオンはボイコットするように呼びかけているが、あまりに政治的な動きだと感じている。将来の大学の資金を決める重要な要素なので、学生は真剣に回答すべきだと思う。回答した上で主張すべきことは主張すればよいのではないか。これは、有権者が判断ができないから投票しないと行って放棄しているのと同じようなものだと思う。

Q. 大学は NSS で良い結果を得るために、何か対策を練っていると思うか？

良い結果を得るためというよりも、調査結果に対してリアクトしてくれていると感じている。例えば、我々の学科でよく学生から上がるフィードバックとしては、プレゼンテーション能力をもっとつけたいたいというものだが、学生からのこのコメントを受けて、今年のモジュールではプレゼンテーションの練習が強化された。

Q. 昨年の TEF の導入により、今年から授業料がインフレ率に応じて 9,250 ポンドに上げられることが決定した。これは日本の国立大学に比べて高い授業料だが、英国ではどれぐらいの学生が奨学金（要返済・無返済含めて）を受給しているのか。

多くの学生は学費のローンと別に、生活費をカバーする Maintenance loan system<sup>16</sup>を利用している。Maintenance loan system は両親と一緒に住んでいるか、一人暮らしか等の条件により金額が変わるが、ロンドン以外の地域で実家暮らしの場合、ベーシックローンが 3,600 ポンドとなっている。これは皆返済しなくてはならない。加えて、低所得家庭の学生はこれに上乗せして、7,000 ポンド程度まで受給することができるが、3,600 ポンドを越える分については返済の義務がない。その他に、低所得家庭の学生が利用できる大学独自の給付型奨学金もある。我々の周りでは、95 パーセント以上の学生がなんらかのローンを組んでいるのではないかと思う。稀に、卒業後の就職を約束するのと引き換えに、企業が学生の授業料を支払っているというケースもある。卒業後、年間の収入が 21,000 ポンドに達するまでは、これらのローンを返済する必要はない。

### 5-3-3. PhD 学生 2 名 (Course reps)

Q. ミーティングにおけるチェアの役割はどういうものか？

ミーティングをアレンジして、議題を進めるのが仕事だ。

---

<sup>16</sup> <https://www.gov.uk/student-finance/overview> (2017年2月6日アクセス)

Q. どのように学生グループの意見を集めているのか？

一番多いのは実際に会話をして学生の声を集める方法だ。その他には会議の前に何か私達に話すことがないかメールで尋ねている。あとは、ウェブサイトに匿名の要望フォームもある。電子的な方法で意見を集めるのは難しい。相手がメールを読んでいなかったりして、その後のコミュニケーションがスムーズに行かない。実際に会って話すのが一番良い方法だと思う。

Q. これまでに取り組んだ大きな案件はあるか。

PhD 学生は毎年最後にレビューを行うが、その中で、学生への対応が平等でないという問題が昨年挙げられた。なので、全ての学生が平等に扱われるように話し合った。また、現在大学が PhD 学生のティーチング活動に対してどのように報酬を支払っていくかを変えようとしているので、その契約に関わる内容も話し合っている。留学生に対する英語のサポートについても話し合った。大学は留学生向けの英語の授業を廃止しようとしたが、どれだけの学生がその授業を必要としているか調査し、存続を訴えた。特に PhD には多くの留学生が在籍しているので、語学レッスンは彼らにとって重要だと考えている。

また、PhD 学生を対象に、年一回、研究発表のためのミーティングを開いている。そこで、一人 15 分で自身の研究を発表する。15 分という短い時間で自分の研究をまとめることは将来学会で発表するための練習になるし、違う視点からコメントがもらえたり、同じ学府の別の研究室とのコラボレーションのきっかけになることもある。

Q. Course reps になること、そしてチェアを勤めることは、あなたの就職にポジティブに働くと思うか？

CV に書くのに良い材料になると思う。コンピューターサイエンスは専門的な学問分野なので、ハードスキルは身につくのだが、コミュニケーションのようなソフトスキルの不足が指摘されることもある。その点、これらの活動の中で学生とコミュニケーションをとり、様々な問題解決を図っていくことはソフトスキルの習得に役立っていると思う。

Q. 大学院生によるティーチングについて

大学からは、1年のトータルで 20 週間・週に 6 時間超えないことが推奨されている。義務ではなく、時間のノルマもない。しかし、給料がもらえるので、ほとんどの学生が教えている。6 時間には準備時間も含まれるので、実際のティーチングは 2-3 時間だ。イギリスの大学にはレクチャーとセミナーという授業の形式がある。レクチャーは大講義室で多くの学生に向けて講義をするというもので、これは教員が担当する。セミナーは小さなグループに分かれてディスカッション等を行う授業形式だが、こちらを大学院生が教えることが多い。1 時間につき、12-13 ポンド支払われるので、生活の足しになる。

Q. TEF は大学院生にとって関心があるか？

私達はティーチングをしているので、評価の対象になる。そういった意味でむしろ気にしている人はいるかもしれない。現状では、大学院生向けに 3 時間のティーチング方法に関するセッション

ョンがあり、それを受ければ大学院生も先生になる。TEF 対策として、もう少し、大学院生が教育活動に従事する前の準備教育をきちんとやった方がよいのではないかという議論は出ている。まだ実行には移されていないが、トレーニングを多く受けた人は給料の面で優遇するべきなどという意見が出ている。学部生の授業のうち 1/4 にあたる授業が大学院生により実施されている。

## 5-4. University of Manchester (Students' Union)

大学の特徴：イングランド北西部のマンチェスターに位置する英国最大の総合大学。学生数 33,770 名（学部生 25,795 名、大学院生 7,975 名）。留学生の割合は 24.7%。  
※Good University Guide 2016 より。

訪問日：2017 年 1 月 27 日

インタビュー対応者：Emma Atkins, Education Officer,  
University of Manchester Students' Union

※2016 年 7 月にマンチェスター大（学部）を卒業すると同時にユニオンの Education Officer に就任。ユニオンでの活動を中心に聞き取り調査を実施した。



U of Manchester Students' Union にて。左：Ms  
Emma Atkins 右：筆者

### Q. Ms Atkins の活動について

#### 1. ライフスキルワークショップの実施

数週間後にパートタイムジョブフェアというものが控えている。これは、学生・卒業生にパートタイムの仕事の情報を提供するものだが、それとあわせてどのように税金やビルを支払うのか、また銀行口座開設にかかる情報など生活を管理するための情報も合わせて提供している。大学生になると同時に一人暮らしを始める学生もいるため、このような情報が助けになると思う。また、留学生も多くいて、母国とは全く違うシステムでやっていかななくてはならないので、彼らにも大変有益であると思っている。このイベントは年に 1 回開催しているが、他にも随時ジョブフェアやボランティアフェアなどを開催している。

#### 2. 教育資源の活用促進

テキストブック・レスキューという活動を行っている。学生に使わなくなった教科書を図書館に寄付してもらい、テキストを必要とする学生に無料で提供している。貸し出しているのではなく、早いもの勝ちで持っていくことができる。学生が大学に通うためにかかる費用は膨大なものなので、学生の負担を少しでも減らすためにこのような取り組みを行っている。昨年は 600 冊以上の教科書が集まった。

### 3.学部間の対話の実現

マンチェスター大には100名以上の Student reps がいる。私は昨年 School of Arts の Student rep をしたが、他の学部の Repts と交流する機会が無かった。なので、私は Repts 同士が学部を越えて交流できるようにフォーラムを開催し、各学部でどのようなアプローチで問題解決に取り組んだのか等をシェアしている。これまでに1回開催したが、次は2月のはじめに開催する予定だ。今後月に1回のペースで開催する予定だ。2月のフォーラムでは成績評価について、3月は一般的な教育や学習について、4月はプレイスメント<sup>17</sup>を、5月には大学に通うための経費削減をテーマに議論する予定だ。基本的には Repts 同士が意見を交換することができる場を提供することが目的なので、このミーティングは学生のみが参加し、アカデミックスタッフは参加しない。教員とは切り離れた場にしたいと思っている。いずれにせよ Repts は学部の会議に出席するので、必要な意見はそこで教員に届けることができる。

#### Q. 昨年 Student rep をした際、学生からどのような相談があったか？

受けようと思っていた授業が閉講されて困っているという相談を受けた。これについては今も大学側との調整を継続中だ。授業がなくなってしまうということは、例えば教員の異動などで、仕方なく起こってしまうこともあるが、コミュニケーションが十分でないと、学生は裏切られた気分になってしまう。十分な説明が必要だ。

#### Q. ユニオンと Student reps の関係について

Repts が決まったら、ユニオンが Repts 向けのトレーニングセッションを開催する。これは一度きりだが、Repts の仕事を進める中で、困ったことがあればいつでもユニオンに相談できる。ユニオンの中で Education officer だけが教育を担当しているわけではなく私達はチームで働いている。Education enhancing manager という人が別について、その人が Repts のトレーニングを担っている。他にもインターンも2人いて、みんな有給である。教育とデモクラシーをつなぐ Education and advocacy manager もいる。教育は大学にとって大きなテーマであり、扱う内容も多いので、チームで助け合って仕事をしている。仲間に恵まれ、とても楽しく仕事をしている。

### 4. 大学における既存のサービスの維持

例えば、昨年私が Rep をしているときに、大学では E ラーニングの充実を図っていることを知った。オンラインに教材が上がっていればプリントしたり、購入する必要がなく、これは学生にとってとても便利だ。大学が E ラーニングの充実を引き続き進めるよう、働きかけている。オンラインコンテンツの内容は各学部によって異なる。また、図書館にはブックスオンデマンドというサービスもある。読みたい本をオンラインで探して電子データあるいはペーパーなど好きな形で受け取れるというものだ。

---

<sup>17</sup> 一定期間、大学の提携する企業等において職業体験を行うもの。

## 5. 地域を巻き込んだ教育活動の支援

20名の学生ボランティアが参加するスピーク・アップという活動があり、地元の学校で、英語を母国語としない子供の親達に英語を教えている。

Q. 実に様々な活動を主体的に行っているようだが、これらの活動をとおしてコミュニケーションスキルなどのトランスファラブルスキルは身につけていると思うか。

そう思っている。はじめは何も分からず、これらの仕事を進めていくのは大変なことだと感じた。しかし、やるにつれて学んでいき、学生と教員の橋渡しをする中でコミュニケーションスキルやEメールを書くスキル、報告書にまとめるスキルなど様々なスキルが身についたと思う。また、チームワークも養われた。

Q. NSSについてどのように考えているか。

今、「ボイコット NSS」というキャンペーンを行っている。オックスフォード、ケンブリッジ、ブリストル、シェフィールド、ロンドンにある多くの大学を含む25大学のユニオンが活動に参加している。教育とは複雑なもので、このような単純な調査で教育の質が計れるものではないと思っている。それにこの調査では回答者が、教員の教育の質に関係なく、教員のことが好きか嫌いかが結果に影響してしまうと思う。教員は学生に好かれなくてはならないというプレッシャーにさらされてしまうのではないかと考えている。

Q. 学生ローンについてはどう思うか。

かなり多くの学生がなんらかのローンを取得している。現在、このローンは民間企業に売却されたため、大学に入学し、給付が始まると同時に(私の場合)毎月100ポンド程度の利子がかかっている。これは学生にとって大きな負担だと考えている。

## 6. まとめ

今回このテーマを調べる中で英国の高等教育を取り巻く様々な状況が見えてきた。まず一点目に、英国では高等教育さえも自由競争の波にさらされようとしている点である。これは、国全体として眺めてみたときに、高等教育が一種の産業である英国ならではの状況であると感じずにはいられなかった。英国の大学は世界の学生から見ても魅力的な地位を保っており、留学生に課されるとりわけ高い授業料にも関わらず、世界各国から多くの学生を惹きつける存在である。個人的には、日本とは、高等教育への捉え方が少し違うように感じた。その反面、英国の大学進学率は約40%<sup>18</sup>と日本に比して少ないという現状があり、高等教育人口を増やすことが、直接的・間接的に経済成長に繋がると考えられているのである。しかし、高等教育人口を増やしても、政府

<sup>18</sup> <https://www.gov.uk/government/statistics/participation-rates-in-higher-education-2006-to-2014> (2017年2月6日アクセス)

の財政を圧迫させるわけには行かないので、授業料を引き上げる、あるいは上限が取り払われる（TEF が試行中なので、どのような形に落ち着くか分からない。）という流れになっている。これについては、当然大学関係者や学生の間で大きな議論を呼んでいる。筆者は幸運にも、都市部に位置する SOAS 及びマンチェスター大学と、比較的郊外に位置するウォーリック大学という性格の違う 3 つの大学に聞き取り調査をする機会を得た。問題への捉え方には、個人によって温度差があるように感じた。しかし、いずれにしても、学生を含め、インタビューに対応して下さった全ての方々が自分の意見をしっかり持っており、議論好きと言われる英国らしさを感じる事ができた。英国の大学では授業でもディスカッションが取り入れられるとはよく聞く話だが、それも妙に納得がいった。

NSS については、TEF と連動していることから、当初の予想よりはるかに批判的な意見を多くいただいた。もちろん、TEF のように NSS や就職状況調査等に頼って、教育の質を判断し、それを授業料に反映するという戦略は乱暴としか言いようがない。NSS の設問やシステムそのものが完璧でないことも分かった。しかし、聞き取り調査を通じて、NSS のような調査は使い方によっては、学生の意見を大学が認識し、より良いコース運営を実現するために活用できるものであると感じた。その他にも学生の意見を取り入れる仕組みは確かに英国の大学に根付いているという印象を得た。この点については、日本の大学がもう少し取り入れても良い点ではないか。

学生を代表するキープレイヤーであるユニオンのメンバーに聞き取り調査をできたのも非常に有意義であった。実際に話を伺うと、会議への出席にとどまらず、主体的でユニークな各種の取り組みを通じて学生の声を代弁しており、大変感銘を受けた。英国ではエンプロイヤビリティという言葉をよく耳にした。報告書中でも紹介しているが、NSS の調査結果と合わせて就職状況調査の結果も Unistas というウェブサイトにて広く公開され、驚くことに、大学・コース別に、卒業生の平均給与までが露骨に掲載されている。このような背景を考えればエンプロイヤビリティが取り沙汰されるのもなんら不思議ではなく、ユニオンの活動はユニオンのメンバーのみならず、その活動に関わる全ての学生にコミュニケーションスキル、チームワーク、問題解決能力などのトランスファラブルスキルを養う機会を与える重要な場となっているのではないかと感じた。

本聞き取り調査を通じ、英国における高等教育の良い面、悪い面を含め、様々な面を知ることができた。高い授業料をカバーするために（と言うより、親に頼るという発想がないのかもしれない）多くの学生が利用している学生ローンや、TEF 対策のために大学院生向けのスタッフディベロップメントに関する議論も出始めていることなど、個別に調べてみたい事象も多く見つかった。これからも自分なりに調べていきたい。

EU 離脱が英国の留学生・研究者受入政策や EU からの研究費の獲得に与える影響も定かでない中、英国の高等教育はめまぐるしく変化している。本稿で紹介した質保証の仕組みは数年後にはすでに変わっているかもしれない。しかし、学生の声を取り入れるという動きは続いて行くのではないだろうか。英国の教育の質保証において大きな特徴の一つである「学生の声をより良い教育に繋げる仕組み」を理解する上で、本報告書がその一助となれば幸いだ。

## 謝辞

本稿の作成にあたり、お忙しい中、聞き取り調査にご協力いただいた SOAS、ウォーリック大学、マンチェスター大学の皆様に心より御礼申し上げます。また、本研修に快く送り出してくださいました九州大学の皆様、並びに JSPS 東京本部での研修期間中にお世話になった研究協力第一課の阿部前課長、笹川課長、瀬川係長はじめ皆様、そして、英国での研修期間中、貴重な情報と経験を数多く与えてくださり、暖かく見守ってくださった、竹安前センター長、上野センター長、大萱副センター長、中塚アドバイザー、Polly 現地職員、山田現地職員はじめ、ロンドンセンターの皆様に心から感謝申し上げます。

参考文献（アクセス日は全て 2017 年 2 月 6 日）

- [1] 諸外国の高等教育分野における質保証システムの概要 英国 第 2 版（2015 年版）

大学評価・学位授与機構 HP より

[http://www.niad.ac.jp/n\\_kokusai/info/uk/overview\\_uk\\_j\\_ver2.pdf](http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/info/uk/overview_uk_j_ver2.pdf)

- [2] アルカディア学報（教育学術新聞掲載コラム）

No.477 「英国における学生中心の高等教育 教育等情報の発信政策から見えるもの」 秦 絵里（大学評価・学位授与機構評価事業部国際課長）

<https://shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0477.html>

No.478 「英国における学生中心の高等教育 学生の経験の質向上の取組」 秦 絵里（大学評価・学位授与機構評価事業部国際課長）

<https://shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0478.html>

- [3] Students at the Heart of the System

GOV.UK よりダウンロード

[https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment\\_data/file/31384/11-944-higher-education-students-at-heart-of-system.pdf](https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/31384/11-944-higher-education-students-at-heart-of-system.pdf)

- [4] Success as a Knowledge Economy: Teaching Excellence, Social Mobility and Student Choice

GOV.UK よりダウンロード

[https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment\\_data/file/523546/bis-16-265-success-as-a-knowledge-economy-web.pdf](https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/523546/bis-16-265-success-as-a-knowledge-economy-web.pdf)

- [5] Guidance October 2016/29 Annual Provider Review

HEFCE HP よりダウンロード

[http://www.hefce.ac.uk/media/HEFCE,2014/Content/Pubs/2016/201629/HEFCE2016\\_29.pdf](http://www.hefce.ac.uk/media/HEFCE,2014/Content/Pubs/2016/201629/HEFCE2016_29.pdf)

- [6] Teaching Excellence Framework: year two specification

GOV.UK よりダウンロード

[https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment\\_data/file/556355/TEF\\_Year\\_2\\_specification.pdf](https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/556355/TEF_Year_2_specification.pdf)

- [7] JSPS London Newsletter No. 50 英国学術調査報告

「新たな教育評価制度（TEF）の試行」 JSPS London アドバイザー 中塚 淳子

[http://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL\\_50L.pdf](http://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_50L.pdf)

[8] The full list of NSS questions – UCL

UCL の HP よりダウンロード

<https://www.ucl.ac.uk/srs/governance-and-committees/qme/qmea-z/nss-questions.doc>

[9] SOAS Students' Union

<https://soasunion.org/>

[10] University of Warwick Students' Union

<https://www.warwicksu.com/>

[11] University of Manchester Students' Union

<http://manchesterstudentsunion.com/>